

タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2017 成果報告レポート

助成番号 17-2-1

プロジェクト名 ニコゼミ 2018 最小で最大のコミュニケーションに出逢う!!!

団体名 認定特定非営利活動法人ニコちゃんの会

所在地 福岡県

助成額 180万円

設立年 1992年

URL <http://www.nicochan.jp/>



（団体について）

当団体は、「どんなに重い病気や障がいがあっても、その人らしい心豊かな人生を生き抜く」ことができる社会を目指して活動しています。芸術・研究・啓発・介護（日々の生活のサポート）など多岐にわたる活動を、障がい児の親をはじめとし、医療・デザイン・舞台・教育など幅広い分野のスタッフで企画・運営しています。

（助成による活動と成果）

本プロジェクトは、重い病気や障がいのある子どもと社会をつなぎ、医療福祉に関わる新たな人材を発掘・育成する取り組みです。重い病気や障がいのある子どもと関わる機会の少ない人を対象に、出逢い、学び、考え、再会し、そして学んだことを他者に伝える報告会という5つの学び時間から成り立つコミュニケーション講座「ニコゼミ 2018 最小で最大のコミュニケーションに出逢う!!!」を開催してきました。テーマをアウトドアとし、どんな子どもとも関わるすることができる人材を育成するため、アウトドアでの遊びを通して学んでいきました。

その中で、受講生は、重い病気や障がいのある子どもに出逢い、まず無意識に抱いていたネガティブな自らの想いに向き合い、知らなかったことをたくさん学び、しっかり関わることで、子どもたちに対しての意識や関わりの姿勢に大きな変化を遂げていきました。その変化が読み取れる受講生の講座後の感想をご紹介します。

「自分とは違うと思ってたけど、彼らにとっての普通があって、私となんら境がないんだと思った。」

「舌で意思を伝える子に会い、私にもその意思表示がやっとわかった。」

「“何もできない”男の子に、すべて教えてもらった。」

このように、受講生にとって、子どもたちとの出逢いが、自らの考えや行動を大きく変えるものとなっていきました。今回の受講生は看護や保育の大学生などが多く、これからの医療福祉や社会を担う人材から、今後子どもたちと意欲的に関わりたいという意見が多くでており、当法人のみならずこれからの社会にとって大切な成果を得ることができたと考えています。

また、2年間タケダ・ウェルビーイング・プログラムに助成いただくことで、受講生だけでなく一般の報告会来場者なども含め、多くの人に重い病気や障がいのある子どもについて出逢い知ってもらうことができました。まだまだ「障がい」という言葉で難病も脳性マヒも知的障がいも、全てがひとくりにされてしまう世の中で、重い病気や心身障がいのある子どもたちについて知ってもらう機会をつくれたことは、大きな意義があったと感じています。

（残された課題、新たな課題）

2年間ニコゼミを開催することで、連続で受講してくれる人やボランティアとして関わりをもってくれている人もいます。しかしながら、ニコゼミやイベントを通しての繋がりがほとんどで、もっと日常的な関わりや細く長く繋がるための工夫が今後の課題だと捉えています。法人として、新たな施設ができたこともあり、多様な関わりの方を探る必要性を感じています。

重い病気や障がいのある子どもの受け皿づくりを進めるうえで、一般向けのイベント開催で広く知ってもらうこと・ニコゼミなどで深く関わってもらうこと・継続して関係を築いていくことの、全てが同時に必要なことだと考えています。

（活動の背景・社会的課題）（団体からのメッセージ）

重い病気や障がいのある子どもの現状というのは、家族・特別支援学校の教師・医療・福祉関係者が多くを占めます。医療的ケアが必要になればなるほど、外出は困難になり、学校も通学ではなく教師が自宅に来る訪問学級になります。なかなか同年代の子どもとあそぶ機会は少なく、大人との接し方にしても、医療・福祉関係者とは生命や生活に必要なケアが中心で、深いコミュニケーションの時間はなかなか設けられません。

子どもは親や教師、まわりの大人によって様々な教育を受けたり常識を教わったりしますが、それと同時に他者と対等に接する中で、知恵や創造性、空気を読む力、他者を大切に思う心など、多くのことを学び成長していきます。そのような年齢に応じた人間関係を築きながら成長していくことが彼らには難しい状況にあります。

それから、彼らは身体的表現はもとより発語や表情にいたるまで非常に限られた動きでしか発信することができないため、発信がないものと捉えられていたり、感情や人としての尊厳を軽んじられることも、珍しいことではありません。彼らを取り巻く医療・福祉の現場でさえ善悪問わずそのようなことは日常的に起こっています。さらに普段から彼らと接することのない人が出会うとすればなおさらそうなることは必至です。

しかしながら、彼らは手術や医療的ケアによる身体的なストレスや、コミュニケーションの取りづらさ・制限のある生活による精神的な負荷を日常的に経験していることもあり、年齢以上の精神力を持っていることは少なくありません。さらに、指のかすかな動きや眼球の動きなど、最小の動きで最大限に人にメッセージを伝えることができます。受け手がそれに気づきしっかりと受け止めるスキルやきっかけさえあれば、彼らは人にメッセージの内容以上の大きな感動や喜びを与えてくれます。それは人と通じ合うことができるという人間本来の持つ欲求が付加価値となって、人に大きな気づきをもたらしてくれるのです。そのような彼らの最小で最大限の発信に気づき、また引き出し関わることのできる人材が、今後もっともっと必要になってきます。

医療の発展した現代、重い病気や障がいのある子どもが他者と対等に接し学びを得る機会と、彼らの発信に気づき関わることのできる人材の育成のふたつが、彼ら自身の人間的成長と多様性を認める社会全体の成熟にとって重要な課題であると言えます。

以上